定家監督書写の源氏物語

日本文学／准教授　岸本理恵

一、はじめに

藤原定家が書写に関わった『源氏物語』は、一体どのような本であったのか。このことは大島本『源氏物語』について再検討が加えられ、「青表紙本」という呼称を考え直す動きの中でますます悩ましい問題となっている。[1] 定家の関わった『源氏物語』の写本で現存するものは、「花散里」、「柏木」、「早蕨」、「行幸」の四帖（以下に「四半本」とする）があり、これらは定家自筆本として扱われることも多い。詳しくは後に述べるが、「柏木」などは冒頭に定家筆の部分があるが続きは別筆でいわゆる定家監督書写本である。他に、定家自筆本『奥入』に切り残された『源氏物語』の各巻末の本文も、ごくわずかながら定家の関わった『源氏物語』本文として現存する。厳密には定家筆ではないが、定家による本文校訂の筆が多く残ること、続く奥入が定家自筆であることから、ここに本来あった『源氏物語』本文も書写に定家が関わったものとして認められる（以下にこの『源氏物語』を「六半本」とする）。

定家の『源氏物語』書写については、『明月記』元仁二年（一二二五）二月一六日条[2]に、

自去年十一月、以家中小女等令書源氏物語五十四帖、昨日表紙訖今日書外題

とあり、「家中の小女等」を動員して書写させたことがよく知られている。「柏木」を始めとする四半本も側近を用いた書写であり、『奥入』に残存する六半本も側近の筆に定家が校訂を加えていて、ともに『明月記』の記述に合致する。四半本と六半本のいずれが『明月記』に見る元仁二年の写本であるのか、いずれが先でいずれが後の書写なのか、二つの本文はどのような関係であるのか。この二種の『源氏物語』の間にもさまざまな問題があり、議論されているところである。しかし、少なくとも、この二種の写本がともに定家の監督書写によるものであることは、多くの人が認めるところであろう。

そこで、四半本と六半本の抱える諸問題は一端置いて、定家監督書写本としてこの写本がどのようなものであるのかという視点から、現在確認できる多くの写本との比較をしてみることで、これらの悩ましい問題を解決する糸口を見出すことができればと思う。

二、四半本源氏物語

現存する四半本のうち、前田家尊経閣文庫蔵になる「花散里」「柏木」には複製本がある。[3] その解題によると、大きさは「花散里」が縦二三・七センチ、横一五・三センチ、「柏木」は縦二三・七センチ、横一五・一センチ。各々綴葉装一帖。本文の筆跡は、「柏木」では冒頭を定家で後を側近が書き継いでい

る。巻末の奥入は四半本と六半本の先後関係の問題と絡んで様々論じられるところであるが、定家と思しい筆、少なくとも本文の側近筆とは異なる。また、本文の所々にはやはり定家筆と見られる貼り紙がある。「花散里」は全丁側近筆で、一見して定家と判断できるような書き入れや奥入はないが、「柏木」同様に貼り紙がある。冒頭を定家、続きを側近が書き継ぎ、場合によっては全丁を側近に書かせて後から定家が奥書や勘物を加えたり、本文に訂正を加えたりするのは、まさに現存する定家監督書写本私家集にみられる方法である。安藤積産合資会社蔵「早蕨」については複製本等ないが、徳川美術館特別展図録に見開き二頁分を見ることができる。[4] その解説によると、大きさは縦二二・〇センチ、横一四・一センチで、「花散里」「柏木」とほぼ同じ。この三つの巻から特徴的な字を【表1】にまとめた。

【表1】

「た」は字母「堂」の形に比較的近い、左右の幅をゆったりと取ったのが特徴。「な」は「る」に見紛うような、やや太めの様子。「人」は、ゆったりとして、一画目から二画目へゆるやかなカーブを描きかすれることなくはっきりした線でつなげている。三つの巻の側近筆はいずれもこの特徴を共有しており、同筆として良いと思われる（これを「C筆」とする）。[5]

このC筆は定家監督書写本私家集に見る側近筆の中でも特に定家の特徴をよく捉えた筆で、現存する写本において最も多く見られるものである。同筆資料は、『秋篠月清集』（天理大学附属図書館）、『伊勢集』（同）、『金槐和歌集』、『有房中将集（定家本）』（冷泉家時雨亭文庫）の側近のうち第一筆、『伊勢大輔集』（同）の側近のうち第一筆、『恵慶集』（同）、『仲文集』（同）、『千穎集』（穂久邇文庫）、『檜垣嫗集』（同）、『是則集』（大阪青山歴史文学博物館）、『興風集』（同）などがある。このうち、『有房中将集』『金槐和歌集』から字を集めたものが【表2】である。

なお、残る「行幸」は鮮明な図版を入手し得ないでいるが、『源氏物語大成』の図版に載る一頁を見る限り定家筆でもC筆でもない別の側近筆である。

以上のことから、四半本は少なくとも現存する「花散里」「柏木」、そしておそらく「早蕨」も、書写の方法が定家監督書写本私家集と同じで定家監督下に書写されたものというだけでなく、書写に関わった人物も、多くの私家集と同じであるということになる。

【表2】

三、六半本源氏物語

定家が書写に関与した『源氏物語』のうちもう一方の六半本は、先にも述べたように、自筆本『奥入』（大橋家）が『源氏物語』の各巻の末にあった奥入のみを切り離す際に、奥入の書かれた面の裏側に本文末部分が偶然にも切り離されずに残ったものである。『奥入』としては不要な部分であり、全てに削除記号が付けられている。したがって、『源氏物語』の本文が残らなかった巻も

あるし、残っている場合でも巻末のわずか数行ということがほとんどである。

自筆本『奥入』の書誌は、『日本古典文学影印叢刊』解説によると[6]、大きさは縦一七・五センチ、横一七・四センチ。『源氏物語』の各帖から切り取る際、もとの本の綴じ目を保存するためもとの本の側にやや紙を残して切り取り、その結果『奥入』として失った部分には紙を継いで補筆し一帖に綴っている。よって、本来の『源氏物語』とはやや横の大きさが異なるかも知れないが、ほぼこれと同じ大きさの『源氏物語』であったと見てよい。一四の巻の『源氏物語』本文部分が残存し、全て側近筆で、その側近の筆は複数ある。切り残ったものであるという事情ゆえ残存する本文はわずか数行でありながら、ここには定家による訂正の筆が数多く見えており、これによって六半本もやはり定家の監督書写本と認められるのである。そして六半本の本文の筆を定家監督書写本私家集に見える筆に照らしてみるに、同筆と　認定できるものを見出すことができる。

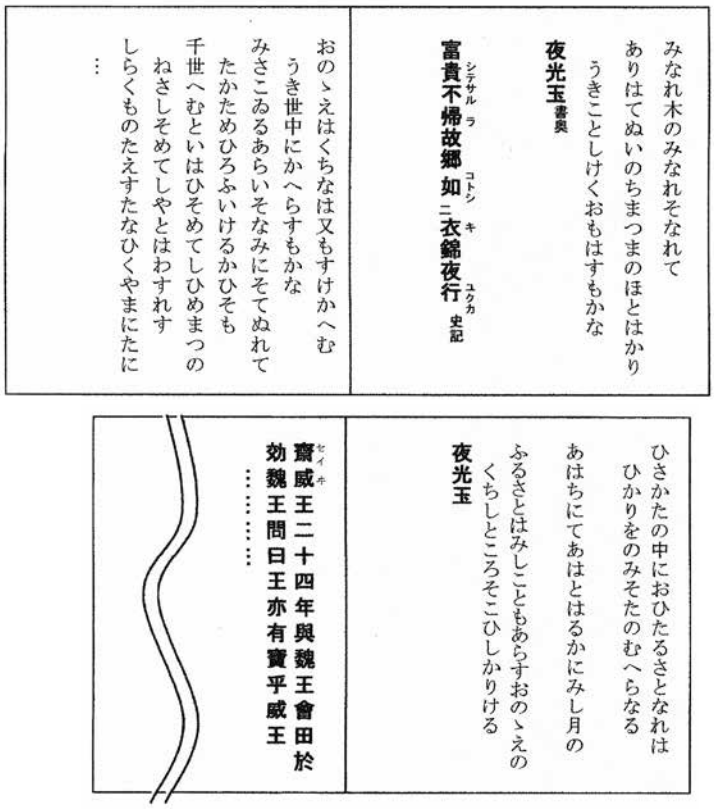
すなわち、『奥入』四〇丁表は「松風」の巻末部分で、これがC筆である（【表3】）。この筆は先に四半本で見たものと同じで、定家の書写をよく支えた人物である。ということは、この六半本も四半本と同じく定家監督書写によるもので、私家集と同様に書写されたものと考えてよい。

【表3】

	六半松風	六半松風奥入	六半澪標
	C筆	C筆	C筆
た（堂）	40オ	41ウ	37オ
な（奈）	40オ	40ウ	37オ 37オ

さらに、『源氏物語』松風巻の本文に続く奥入部分についてその筆跡に注目したい。奥入部分のほとんどが定家自筆による中で、一部に自筆でない部分のあることが早くから指摘されてきた。【図A】の松風巻の奥入冒頭部分（四〇丁裏）の三行「みなれ木のみなれそなれて／ありはてぬいのちまつまのほとはかり／うきことしけくおもはすもかな」は定家ではなく側近のもので、これがC筆と認められる。続く「夜光玉 書奥」と数行分の空白を挟んだ最終行「富貴不帰故郷…」の二行は定家、しかし、続く四一丁表から四一丁裏にかけての和歌七首半はやはりC筆、四一丁最終行「夜光玉」から四三丁表にかけての漢籍の引用は再び定家となる。

【図A】奥入　四〇丁裏～四二丁表



私家集においても側近の筆部分の中に定家の筆が一部に見えることがあり、特にこのC筆の書写に多く見られるようである。例えば、『秋篠月清集』では、【図B】のようにC筆で題の部分（【図B】ではゴシック体の箇所）は定家。歌題の他にも部立や人名など漢字の部分に定家の筆となる箇所が多いようである。つまり、『奥入』においては松風巻の本文部分だけでなく奥入部分においても、本文と同様に定家監督書写本私家集に関わったC筆が見えていて、私家集と同様の書写を行っており、定家との分担の関係にも私家集と同じように行っていた様子が見えているのである。

【図B】秋篠月清集　八四丁表

山家松　院より八幡若宮
歌被奉六首内
すみすてゝ人はあとなきいはのとに
いまもまつかせにはゝらふなり
松風　院より春日社にて
歌合の三首内
つゆしくれそてにもらすなみかさ山
くもふきはらへみねのまつかせ
夢中述懐
うたゝねのはかなきゆめのうちにたに
ちゝのおもひのありけるものを

他の巻についても奥入部分に側近筆が認められる。三七丁表「澪標」の奥入は、和歌二首と一節からなる五行分がやはりC筆である（【表3】左側）。他にも「葵」の奥入にあたる二四丁表から二五丁表は、和歌一四首分三一行に渡り、C筆とは異なる側近の筆である（これをF筆とする）。F筆もC筆と同様に定家監督私家集にその筆を見出すことができる。『斎宮女御集』（冷泉家時雨亭文庫）・『賀茂女集』（同）・『摂津集』（同）・『讃岐入道集』（野村美術館）・『恵慶集』（前田家尊経閣文庫）・『海人手子良集』（前田家旧蔵）がそれである。その様子を【表4】に示した。その特徴は、例えば「の（乃）」は、一画目の縦線が強く引っかかりをもって入るのに対し、二画目の横画は細くなめらかに入る。「人」は細い線ながらゆったりと伸びやかで、隣の行にまではみ出すことが少なくない。

「澪標」「葵」ともに『源氏物語』本文部分は残存していない。この二巻の本文部分を考えてみるに、残存する一四の巻はすべて側近筆であること、「松風」では『源氏物語』本文部分と続く奥入がともにC筆であることから、この二巻も同様に本文と奥入は同じ側近の筆であったことが想像される。つまり、六半本の「澪標」はC筆、「葵」はF筆であったかもしれない。

もう少し六半本本文の筆を見ておこう。「若紫」「早蕨」は同筆で、今のところ定家監督本私家集には同筆資料を見出せずにいるが、天理大学附属図書館蔵『定家小本』がこの筆と認められる。『定家小本』前半の和歌部は、『古今和歌六帖』の歌を中心とした和歌のみが一首三行で並ぶ部分で、定家の『古今和歌六帖』への関心の深さを示すとともに、『奥入』の和歌とも密接で定家の『源氏物語』への関心もよく表れ、さらには『新勅撰和歌集』の撰集にも関わった資料とされている。和歌の部の約二〇丁のうち二丁裏のみが定家で他は側近筆であることが指摘されてきたが、これが六半本「若紫」「早蕨」の筆である（【表5】　これをW筆とする）。なお、これとは別の筆で「真木柱」と「柏木」がおそらく同筆と思われるが（これをM筆とする）、本文の分量も少なく、他に同筆資料も見出し得ていない。

【表4】

斎宮女御集	奥入 葵	
F筆	F筆	
1ウ	24オ	の（乃）
1ウ	24オ	人
8ウ	25オ	す（春）

【表5】

	奥入若紫	奥入早蕨	定家小本
た（堂）			7オ
な（奈）			2オ
あ（安）			15オ
おほ			16オ

『奥入』に見える側近筆を、残存する『源氏物語』本文部分に奥入部分も加えてまとめると次のとおりである（巻名の下に残存行数・判明する側近筆を示した）。

夕顔　（八行）
若紫　（六行）　本文W筆
（葵　本文ナシ）　奥入F筆
（澪標　本文ナシ）　奥入C筆
蓬生　（五行）
松風　（九行）　本文C筆　奥入C筆
玉鬘　（一行）
初音　（五行）
行幸　（六行）
真木柱（一二+二行）本文M筆
梅枝　（八行）
藤裏葉（六行）
柏木　（一二+五行）本文M筆
竹河　（七行）
早蕨　（六行）　本文W筆
蜻蛉　（三行）

以上のように、残存する『源氏物語』本文部分は行数が少なく私家集との同筆関係を認定しづらいものも多いが、定家監督書写本私家集を多く書写するC筆による本文が「松風」に見え、「若紫」「早蕨」の筆は『定家小本』と一致する。『源氏物語』本文のみでなく、分量はわずかながら注の部分にも複数の側近の関与が見えていることは、定家の監督書写のあり方やその意義を示しているようである。すなわち、側近を用いた書写は私家集やそれに準ずる資料に限定されるものでは決してなく、また動員した人々は私家集専属というようなことはなく様々な資料を書写した様子が見えてくるとともに、定家の『源氏物語』研究にも側近の書写が深く関わっていることが認められよう。

四、まとめ

六半本に残された『源氏物語』本文は、わずかな丁数で各巻とも巻末の数行程度でありながら、定家による訂正の筆が多い。「真木柱」（六一丁表）などは一一行の本文に七箇所の訂正がある。わずか一面でこれほどの加筆があるということは、全丁にわたって相当な加筆があったものと想像される。定家監督書写本私家集においても訂正の筆は珍しくないが、これほどまでの加筆は見られない。定家の『源氏物語』研究の熱心な様子がうかがわれるところである。定家の『源氏物語』への深い探求と熱意は『物語二百番歌合』などにも見えるところであり、詠作に取り入れている様子からも知られる。とすれば、片桐洋一氏が「定家が『源氏』五十四帖を書写したのは、この元仁二年のただ一回だけであったと断定してしまうのは如何であろうか」として、『明月記』に記述がなくても、現存本や現存本の書写奥書などから定家は三代集や『伊勢物語』を複数回書写していることを指摘するように[7]、『源氏物語』も複数回書写したことは何の不思議もない。定家は私家集の書写においても、同一歌人の家集であっても多くの歌を集めるために異なる本を求めて書写していた様子が、『順集』や『恵慶集』などから確認できる。これと同じく多くの『源氏物語』を求めていたことは十分に想像されるところであるし、遠藤珠紀氏が定家の書状の

分析によって「定家が広く諸本を求めていた[8]」と明らかにするところでもある。むしろ、複数回書写したことを想定する方が自然であろう。

既に様々論じられているように、定家による『源氏物語』写本の六半本と四半本には違いがあり、そこから生じる問題も多い。この四半本が鎌倉期の『源氏物語』写本として異質であることは様々指摘があるように[9]、現存する『源氏物語』の鎌倉期写本は古筆切も含めてほとんどが六半本である。河内本『源氏物語』の大きさに特異な感じを抱くのと同様、定家の四半本『源氏物語』は大きさこそ河内本より小さいがやはり違和感がある。形の違いには何らかの意味があることは認めるべきであるが、残念ながら今その答えを持ち合わせていない。

しかし、以上見てきたことから分かることは、定家の『源氏物語』は四半本も六半本も両方とも私家集の書写に関わった人物を動員して定家の監督の下に書写されているということである。少なくとも、例えば定家が自筆で書かなければならないような事情を抱えた本ではなく側近に書写させたもので良いということで、この点においては両本に違いはなく、共通点もまた多いということも言えるのである。四半本も六半本もその書写は『源氏物語』に閉じたものではなく、私家集やその他定家の監督の下に書写された本として比較検討していくべきであろう。

〈注〉

（1）中古文学会関西部会編『大島本源氏物語の再検討』（和泉書院・二〇〇九年）のほか、二〇一四年度中古文学会春季大会ミニシンポジウムは、「定家本・青表紙本『源氏物語』とは、そもそも何か？」と題して行われた（『中古文学』九四に収録）。二〇一五年度中古文学会秋季大会のシンポジウム「室町戦国期の『源氏物語』―本の流通・注の伝播―」では、佐々木孝浩氏による提言「室町・戦国期写本としての「大島本源氏物語」」があった。

（2）冷泉家時雨亭叢書第五十八巻『明月記三』（朝日新聞社・一九九八年）

（3）原装影印古典籍覆製叢刊（太田晶二郎解題・雄松堂書店・一九七六年）

（4）『王朝の雅び千年―物語文学の世界―』（徳川美術館・二〇〇四年一一月）

（5）側近筆を区別するためのアルファベットは、本稿のもととなった口頭発表における資料に合わせた記号を用いた。（「定家監督書写本私家集の周辺」〈和歌文学会関西一二月例会・二〇一三年一二月七日・大阪府立大学〉、「藤原定家の和歌研究と監督書写」〈和歌文学会第六〇回大会・二〇一四年一〇月一九日・青山学院大学〉）

（6）日本古典文学影印叢刊『奥入 原中最秘抄』（池田利夫解説・貴重本刊行会・一九八五年）。『複刻日本古典文学館 第一期 奥入』（日本古典文学刊行会・一九七一年）に複製本がある。

（7）片桐洋一「もう一つの定家本『源氏物語』」（『源氏物語以前』笠間書院・二〇〇一年、『中古文学』二六・一九七八年一〇月初出）

（8）遠藤珠紀「嘉禄年中の藤原定家―『明月記』嘉禄二年記紙背文書を通して」（『明月記研究』一〇・二〇〇五年一二月）

（9）加藤洋介「青表紙本源氏物語目移り攷」（『国語国文』七〇・八・二〇〇一年八月）、佐々木孝治「二つの定家本源氏物語の再検討―「大島本」という窓から二種の奥入に及ぶ―」（中古文学会関西部会編『大島本源氏物語の再検討』和泉書院・二〇〇九年）などがある。

【付記】本稿は、和歌文学会関西一二月例会（二〇一三年一二月七日・大阪府立大学）における口頭発表「定家監督書写本私家集の周辺」、および和歌文学会第六〇回大会（二〇一四年一〇月一九日・青山学院大学）における口頭発表「藤原定家の和歌研究と監督書写」に基づくものです。ご教示頂きました先生方に感謝申し上げます。また、JSPS科研費（25770089）の助成を受けたものです。